ヘンリー・ストークス氏、加瀬英明氏特別対談

東京裁判史観の受け入れは愚かだ

『英国人記者が見た連合国戦勝史観の虚妄』（祥伝社新書）がロングセラーとなっている。著者は三島由紀夫と親しかったニューヨーク・タイムズの元東京支局長、ヘンリー・スコット・ストークス氏。翻訳は藤田裕行本紙論説委員。共同通信は五月、本書を貶めるために、翻訳者が「南京虐殺を否定、無断で加筆した」と捏造記事を配信した。ストークス氏と共著『なぜアメリカは、対日戦争を仕掛けたのか』（祥伝社刊）を著した外交評論家、加瀬英明が対談した。聞き手は藤田論説委員。

藤田　『英国人記者が見た連合国戦勝史観の虚妄』が十万部を超えるベストセラーとなって話題を巻き起こしています。

ストークス　欧米人で、このような本を出したのは、歴史上私が初めてでしょう。東京裁判、南京事件、慰安婦などについて、連合国側のジャーナリストが、日本側の主張を肯定する内容ですからね。

加瀬　「所謂南京大虐殺は、歴史上、事実としてはなかった」と述べたことは、衝撃的だったのでしょうね。共同通信社は「南京虐殺否定、無断加筆」と世界中に記事を配信して本の出版を潰そうとしましたね。

ストークス　共同通信は出版社に「出版停止にして、本を回収しますか」と言ってきた。

加瀬　記事が配信された翌日に、著者が署名した見解を、英語と日本語で出版社のホームページに掲載した。

ストークス　内容は次のようなものでした。

（一）共同通信の取材に基づく一連の記事は、著者の意見を反映しておらず、誤りです。

（二）「（南京）虐殺否定を無断加筆、ベストセラー翻訳者」との見出しも、事実ではありません。

（三）著者と翻訳者の藤田裕行氏との間で、本の内容を巡って意思の疎通を欠いていたとの報道がありますが、事実と著しく異なります。

（四）共同通信は一九三七年十二月に南京で起きた事に関する第五章の最後の二行の日本語訳が著者の見解を反映していないと報じています。共同通信は問題を針小棒大にしています。著者の見解は「所謂南京大虐殺はなかった。大虐殺という言葉は、起きた事を正しく表現していない。元々、それは中華民国政府のプロパガンダだった」というものです。

（五）本書に記載されたことは、全て私の見解です。祥伝社と私は問題となっている二行の記述についても訂正する必要を認めません。

加瀬　迅速な対応があったので、あの反日的なジャパン・タイムズまでが共同通信の記事に対するストークスさんや翻訳者の藤田さんの反論を掲載しましたね。

ストークス　ウォール・ストリート・ジャーナルは、共同通信の報道に対する反論をしっかりと載せてくれました。タイムズ誌も「右傾化する日本」という括りの中ではありますが、藤田さんの反論を掲載しました。

藤田　ストークスさんは、南京陥落についてどう思われているのですか。

ストークス　本書を纏めた時は、北村稔教授や東中野修道教授の著書の英訳版（史実を世界に発信する会）をベースにして論を展開しましたが、今は故田中正明先生の訴えられている内容が、最もリアリティがあると感じています。私もベトナム戦争や韓国の光州事件で現地に入って取材をした体験があるので、田中先生の述べることに現実味を凄く感じるのです。もう一人は、阿羅健一氏です。こちらも現場の臭いが感じられる。

加瀬　阿羅さんは南京を戦った将兵や記者から直接話を聞いているので、それが事実だと信じられているのでしょう。田中正明さんは南京攻略戦の司令官だった松井石根大将の秘書をされていた。

ストークス　松井石根大将は、天皇の軍隊が敵の首都攻略という世界が注視する戦いを指揮するのに当って、綱紀粛正を徹底していました。それでも一部に軍紀を乱す行為があったと憲兵隊から報告を受け、涙を流した。

加瀬　ストークスさんは、南京で実際には何があったと思われているのですか。

ストークス　所謂「南京大虐殺」などはプロパガンダで、史実ではない。共同通信のインタビューでも述べましたが、南京では大虐殺などなかった。大虐殺などという表現を使って、南京で起こったことを語るべきではない。散発的な僅かな暴力行為はありましたが、日本軍が南京を占領したことで、寧ろ治安が回復し二十万人とされた人口が、一カ月後には二十五万人に増えているのです。

加瀬　ストークスさんが夕刊フジの取材記事で「南京ではあまり戦闘もなかった」と述べた点は、びっくりした人もいたでしょうね。

藤田　城内に入るまでは激戦でした。日本側にも四万九千近くの戦死者が出ています。

加瀬　ストークスさんは国民政府の蔣介石や軍司令官の唐が敵前逃亡したために、中国人将兵も、まともに戦わずに軍服を脱いで逃げてしまったことを言っているのでしょう。これは、パラオや硫黄島などでの日本軍の敢闘と比べて、ストークスさんの目には、「首都を死守する」と蔣介石が言ったにしては、激戦はなかったと考えたのでしょう。

ストークス　私は南京が他の戦場と違って特別に扱われるのは、そこに原因があったと思っています。中国兵が軍服を脱いで便衣兵となったために、日本軍はその処断を余儀なくされた。便衣兵や不良捕虜の処断は六千八百余と記録されています。

加瀬　そうした捕虜の処断は国際法を守って行ったもので、当時、国民党

政府も国際連盟も、どの国も一切批判をしていません。

ストークス　確かに国際法に準じたものですが、大量の処刑が行われた。そのことは実に悲惨なことだったと思います。しかし、私は共同通信の取材でも、その後の日本報道検証機構とのインタビューでも述べましたが、そういう事態が生じた背景には、日本軍のほかに国民党政府、共産党の三者が関係しており、第一義的にその責任は、敵前逃亡をした蔣介石の国民党政府にあったということです。

藤田　ストークス先生は、東京裁判についてもずいぶんと言及されていますね。

ストークス　東京裁判の法廷には、何度も足を運んでいます。あの本を纏める時にも藤田さんと訪れました。東京裁判が行われていたときに、市ヶ谷の法廷の空気は邪悪で、毒気が漂っていたと多くの関係者から聞きました。東京裁判はマッカーサーが演出した復讐劇でした。

加瀬　ストークスさんは「マッカーサーは自己中心的ナルシストで、映画プロデューサーのように自分を演出した」と語っています。野蛮な日本人に、文明を教えるという演出は欺瞞に満ちていました。

ストークス　東京裁判では、正義、公正といったアメリカが美徳と掲げる価値と全く逆なことが行われました。日本側が提出した証拠資料は殆ど却下し、日本側に有利な論述がされると同時通訳を切り、法廷記録から削除した。そもそもマッカーサーには東京裁判を開廷する管轄権など全くなかったわけです。「平和に対する罪」もそれまで存在していなかった罪であり事後法です。そんな「裁判」などとは到底呼べない法廷で、敗戦国の戦時リーダー七名が所謂A級戦犯として絞首刑に処せられたのです。

　戦後の日本は、この東京裁判に立脚した歴史観を受け入れているようですが、実に愚かなことです。

加瀬　東京裁判は、裁判所条例を出したマッカーサーもウエッブ裁判長も、当時の全ての判事やアメリカ政府要人が後に批判しています。ストークスさんが書かれているように日本は判決を受け入れただけです。裁判を受け入れたのではありません。それにも拘わらず、日本が戦後から今日まで東京裁判史観を受け入れたかのような政治・外交姿勢を取り続けているのは、情けない状況です。

ストークス　東京裁判が出鱈目ですから、東京裁判史観も全く史実に反するプロパガンダに他なりません。今回『連合国戦勝史観の虚妄』を書いた後、私はその思いをさらに強くしました。なんとしても、東京裁判史観から脱却しなければなりません。私は英国人ジャーナリストの立場から、皆さんと共に東京裁判史観の払拭に微力を尽くす所存です。

加瀬　史実を世界に発信する会も、今後さらに英語での発信内容を充実させて、世界に日本の立場を訴えていきます。ストークスさんのように世界一流のジャーナリストが、そうした真実を発信してくれると、心強い限りです。これからも、是非健筆を揮って下さい。

藤田　最後に、今後の出版予定をお聞かせ下さい。

ストークス　いま元報知新聞の植田剛彦さんとの対談本、藤井厳喜先生との対談本など数冊を同時に進めています。加瀬さんとの対談本も着々と進めています。

加瀬　年内にストークスさんとの対談本を出す予定です。内容は日本文化が世界一だというものです。

藤田　本日はお忙しい中、ありがとうございました。

（写真右・ストークス氏、同左・加瀬英明氏）